

3. 用語集

本計画の中に頻出する用語の意味を掲載する。

No.	用語	読み	意味
1	圧磨機	あつまき	黒色火薬を製造する工程で用いる機械。圧輪を回転させて、硫黄や木炭、硝石などを粉砕して混ぜ合わせる。板橋火薬製造所では、幕末に幕臣澤太郎左衛門が留学先のベルギーから輸入し、明治9年に開設した板橋火薬製造所で使用された。加賀西公園に圧磨機をモニュメントにした「圧磨機圧輪記念碑」が設置されている。 (→黒色火薬)
2	一造	いちぞう	東京第一陸軍造兵廠の略称。 (→東京第一陸軍造兵廠)
3	ヴィジュアル・アイデンティティ (VI)	うゝいじゅある・あいでんでいてい	企業などの組織が、企業コンセプト等を反映したグラフィカルなシンボルマークやロゴタイプをはじめとする総合的なビジュアルイメージを設計すること。近年は青森県立美術館や太田市美術館・図書館、大阪中之島美術館など、博物館や美術館でも導入されている。
4	宇宙線	うちゅうせん	宇宙から地球に降り注ぐ非常に高エネルギーの粒子線の総称。宇宙から直接やってくる、主として陽子および中間子を一次宇宙線、それらが大気中の分子と衝突して二次的に生じた陰電子および陽電子を二次宇宙線という。理化学研究所板橋分所では、昭和22年から50年以上宇宙線を連続観測した。スーパーカミオカンデは、宇宙線のうちニュートリノの観測を行っている。
5	火薬	かやく	広義では硝石、硫黄、木炭などの混合物で、衝撃、摩擦、圧力、熱、電気などによって、急激な化学変化を起こし、ガスと熱とを発生して、はげしく爆発するもの。狭義では爆薬と区別して、砲弾や飛行機などを発射推進する用途で用いる火薬類を指す。
6	軽便鉄道	けいべんてつどう	軌道の幅が狭く、小型の機関車および車両を用いる鉄道のこと。日本では3フィート6インチ(1,067 mm)の軌道幅が標準で、これ未満の鉄道を指す。「ナローゲージ」とも呼ぶ。

No.	用語	読み	意味
7	検速儀	けんそくぎ	火薬の効力のうち、弾丸や爆発などの速度を計測する電気仕掛けの機械。板橋火薬製造所では明治10年に検速儀を用いた火薬の試験を実施しており、国内では近代的な測定方法を用いた初めての例である。「験速儀」や「験速器」とも称される。
8	工廠	こうしょう	旧陸海軍に直属し、艦船、兵器、弾薬、機関などの軍需品の製造、修理を行った工場。海軍工廠、陸軍造兵廠の類。軍工廠。
9	黒色火薬	こくしょくかやく	混合火薬の一つで、硝酸カリウム（硝石）、硫黄、木炭の三成分を混合してつくるもの。火つきがよく、摩擦や衝撃で発火しやすい。着火すると急激に燃焼するが、爆発反応は起こさない。火薬の中で最も古くから用いられ、今日では花火や口火などに使用。板橋火薬製造所では、主たる火薬として明治9年から同39年まで生産された。（→無煙火薬）
10	史跡	しせき	広義では歴史に残った事跡や歴史上の出来事にゆかりのある場所、建築物、建物のあった跡のことをいう。狭義では文化財の一類型として、文部科学大臣が古墳や城跡などの遺跡のうち、歴史上また学術的価値の高いものを保護するために指定されたものを指す。
11	下屋敷	しもやしき	江戸時代、全国の大名家は、江戸に上・中・下の三ヶ所の屋敷を構えた。上屋敷は、藩主江戸在府時の正式な住まいであり、政庁であった。中屋敷には、人質である正室や世嗣が住み、藩主もここで暮らすことがあった。下屋敷には、2種類ある。①国元から運ばれた年貢米などの物資を売り捌き、江戸での経費に充てる倉庫。物流拠点である、本所・深川に設けられることが多い。②接待や遊興のための別荘で、庭を設け数寄屋建築が建てられた。甲府藩柳沢家の六義園や尾張藩徳川家の戸山荘が有名。加賀藩前田家の下屋敷（平尾邸）は下屋敷の中でも最大規模であった。
12	射塚	しゃだ	射撃や弓的の的をかけて置く築山形の盛土、または的それ自体のこと。

No.	用語	読み	意味
13	硝石	しょうせき	硝酸カリウムの鉱物。斜方晶系の絹糸状・針状・殻状結晶。無色または灰色で透明なガラス光沢をもつ。世界各地の砂漠地帯、乾燥地帯に産出する。水に溶け、塩味がある。黒色火薬の主成分であり、カリ肥料としても用いる。
14	心理柵	しんりさく	美術館などで壁面等に展示される作品と見学者を仕分けるポールのこと。「結界」や「フロア・パーテーション」とも呼ばれる。
15	スーヴェニア・ショップ	すーうゑにあ・しょっぷ	フランス語で「土産」を表す「souvenir」から、土産物店のこと。
16	築山	つきやま	庭園などで、山に見立てて石または土砂を盛りあげてきずいたもの。また、庭園全体を指すこともある。加賀藩下屋敷平尾邸の一部が本史跡指定地に含まれ、築山の遺構が残る。
17	東京第一陸軍造兵廠	とうきょうだい いちりくぐんぞう へいしょう	昭和15年の陸軍兵器廠令によって、東京工廠から改組され設立された組織で、昭和20年の終戦まで稼働した。東京工廠時代は小銃弾や航空機砲の薬莢などを生産する銃包製造所、無線機や光学機器などの精器製造所、信管を生産する火具製造所が十条に所在しており、これらが陸軍兵器廠令によってそれぞれ第一製造所から第三製造所に改称された。また昭和17年以降は仙台、川越、小杉、大宮にも製造所が設立された。一造とも呼ばれた。(→東京第二陸軍造兵廠)
18	東京第二陸軍造兵廠	とうきょうだい にりくぐんぞう へいしょう	昭和15年の陸軍兵器廠令によって、火工廠から改組された設立された組織で、昭和20年の終戦まで稼働した。火工廠時代は板橋火薬製造所、岩鼻火薬製造所、宇治火薬製造所、王子火薬製造所、目黒火薬製造所、十条兵器製造所(昭和11年に東京工廠へ移管)、忠海兵器製造所、曾根兵器製造所が属しており、いずれも東京第二陸軍造兵廠の組織に改組された。また戦時期には香里製造所、坂ノ市製造所、荒尾製造所、深谷製造所、櫛挽製造所なども新設された。二造とも呼ばれた。(→東京第一陸軍造兵廠)

No.	用語	読み	意味
19	土塁	どるい	土で築いたとりで。城郭や寺院などの敷地の周囲を囲む土製の堤防状の壁。爆発に対する防護のための構造物としても利用され、近代になると火薬庫の防護のためにも建築された。板橋火薬製造所では、火薬庫のほか、製造や研究等に関わる諸施設にも設置されていた。
20	二造	にぞう	東京第二陸軍造兵廠の略称。 (→東京第二陸軍造兵廠)
21	爆薬	ばくやく	火薬と区別して、物を破壊するのに用いる火薬類を指す。ダイナマイト・硝安爆薬・TNTなど。爆破薬のほか武器に装填する炸薬(さくやく)・起爆剤などを含む。
22	兵部省	ひょうぶしょう	明治初期に存在した軍事管掌を専務とする政府の中央機関。明治2年の官制改革により軍務官が廃止されて、新たに設けられた。陸海軍、郷兵、招募、守衛軍備、兵学校を管轄した。明治5年に廃止され、陸軍省と海軍省に分立した。なお明治4年に兵部省は東京府に対して、加賀藩下屋敷の跡地を火薬製造所用地として引渡しを求めており、板橋に設置されるきっかけとなった。 (→陸軍省)
23	無煙火薬	むえんかやく	火薬のうち発射薬の一つで、発射するとき煙が出る黒色火薬にくらべ、煙の発生量が少ない。ニトロセルロース、ニトログリセリンなどを原料とする。板橋火薬製造所では明治27年から日本で初めて生産が開始され、主たる火薬として昭和20年の終戦まで製造された。 (→黒色火薬)
24	ユニーク・ベニユー	ゆにーく・べにゆう	博物館や美術館、歴史的建造物などで、本来の用途・機能とは異なるイベントなどの利用によって活性化を図り、特別感や地域特性を演出することを指す。
25	理化学研究所	りかがくけんきゆうじょ	科学技術に関する試験研究を総合的に行い、その成果の応用・普及を目的とする独立行政法人。大正6年(1917)高峰譲吉の提唱によって財団法人として創設。昭和23年(1948)株式会社に改組して科学研究所と称したが、同33年政府出資による特殊法人となり、平成15年独立行政法人となった。本部は埼玉県和光市広沢。理研。

No.	用語	読み	意味
26	陸軍省	りくぐんしょう	陸軍の軍事行政を管掌する官庁。明治5年(1872)2月28日、太政官の中の一省として設置。同18年12月22日内閣制度発足に際して内閣の行政各部の中の一省になり、第二次世界大戦の敗戦に伴い、昭和20年(1945)11月30日に廃止され、第一復員省に改組された。(→兵部省)
27	陸軍造兵廠	りくぐんぞうへいしょう	大正12年3月30日公布陸軍造兵廠令により、同年4月1日、陸軍の兵器製造を統括する中央機関として東京・大阪両砲兵工廠を合併・再編して設置された組織。その目的は一人の長官による一元的管理と兵器生産の効率化にあり、陸軍所要兵器の考案・設計、兵器その他の軍需品および一般火薬類の製造・修理、これらの製品の検査、ならびに海軍用火薬の製造・修理を担当することが明記された。昭和15年4月1日、東京第一(銃砲・精器・火具各製造所)、東京第二(板橋・岩鼻・宇治・忠海・多摩各火薬製造所と曾根兵器製造所)、相模(神奈川県相模原)、名古屋(熱田・高蔵・千種各兵器製造所)、大阪(火砲・砲丸・枚方兵器各製造所)、小倉(砲具・砲弾・銃器製造所)、南満の植民地を含む体制に改変された。敗戦時には8造兵廠のもと46製造所をもち雇用者約25万人の巨大工場群を形成していた。(→東京第一陸軍造兵廠)(→東京第二陸軍造兵廠)

参考文献

- ・小学館国語大辞典編集部編『精選版 日本国語大辞典』(小学館)
- ・国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』(吉川弘文館)
- ・日本産業火薬史編集委員会編『日本産業火薬史』(1967)
- ・岡本憲之『鉄道・秘蔵記録集シリーズ 失われた「狭い線路」の記録集 究極のナローゲージ鉄道Ⅱ』(講談社、2015)